

## 授業づくり拠点校研修会実践事例

## 1 本校の取組の概要

## (1) 「東中学習スタイル」

本校は、平成25年度から2年間、「岩国市確かな学力推進研究事業」による研究校の指定を受け、すべての生徒が「分かる喜び」、「できる喜び」を実感することのできる授業の在り方について、研究を進めてきた。そして、その中での提案の一つが、「東中学習スタイル」である。

## 「東中学習スタイル」

## ① 授業のねらいを生徒に明示する。

授業の導入部で、「今日の授業で何ができるようになるよいか」をきちんと明示することで、生徒が見通しをもって学習に取り組むことができるようにする。

## ② 適切な小集団学習を設定する。

生徒同士が学び合う場面を設定し、互いの考えや価値観にふれ合いながら、協力して学習課題を解決することができるようにする。

## ③ 学習内容を振り返らせる。

授業の終末部で、「今日の授業を通して学んだこと、分からなかったこと」などを記述する活動を設定することで、学習内容の定着を図る。また、家庭等で自主的に取り組むべき学習課題を明らかにさせる。

本校では、この「東中学習スタイル」を、全ての教科の授業で実践することで、生徒の主体的な学びを保障し、生徒一人ひとりの学習意欲の向上、そして確かな学力の定着をめざしてきた。しかし、授業は、「集団での学び」の場であるため、どうしても、生徒一人ひとりの個に応じた働きかけが不十分になってしまう。そこで、本校では、放課後や長期休業中等に、補充学習の場を設定し、学年や教科の枠を超えて、全教職員で個に応じた指導を行ってきたが、最終的には、学校や家庭を問わず、生徒自身が自主的、主体的に学ぼうとする姿勢を確立しなければ、学力向上は期待できないという結論に至った。そこで本年度は、研修の方向性として、「東中学習スタイル」を基軸とした授業改善の徹底と、生徒の「東中学習スタイル」の意識化、そして家庭学習の充実を掲げることとした。そして、これらの推進にあたって、本校が目指したのが、「生徒の自己指導能力の育成」である。(なお、紙面の関係上、本稿では授業改善を中心とした取組を紹介する。)

## (2) 自己指導能力の育成と学力向上

自己指導能力とは、学校における生徒指導を通して、生徒に育てたい力である。山口県教育委員会は、『よりよい生徒指導に向けて』の中で、「自己指導能力」を次のように定義している。

自己指導能力とは、自己をありのままに認めること（自己受容）、自己に対する洞察を深めること（自己理解）、これらを基盤に目標を確立し明確化していくこと、そして、この目標達成のため、他者との関わりの中で、自発的・自律的に自らの行動を判断し実行することなどである。

このことを踏まえながら、本校では自己指導能力を次のように定義した。

生徒が学習に対する自分の「得意」、「不得意」を客観的に明らかにし、学力向上に向けて必要な知識や技能を習得し、それを活用していく力

つまり、本校が考える自己指導能力とは、「自らの学びをマネジメントする力」ということである。この力を中学校3年間でしっかりと身に付けることができれば、生徒は学校という空間を離れた後も、さらには生涯にわたって、自らの力で学び続けていくにちがいない。そこで本校では、本年度、次のことを研修主題に設定した。

生徒指導の機能を生かした学習指導の創造  
～東中学習スタイルの確立をめざして～

(3) 生徒指導の機能を生かした学習指導（授業）

生徒の自己指導能力を育成するためには、次に示す生徒指導の3つの機能を生かした活動を、教師が授業の中で意図的に設定することが必要である。

① 生徒に「自己決定の場」を与える授業

生徒に「自己決定の場」を与える授業とは、「生徒が学習に対して目標や課題をもって、主体的に取り組む授業」と考える。授業場面に注目して、その具体的な取組を整理すると次のようになる。また、「東中学習スタイル」の「ねらいの明示」と「学習内容の振り返り」は、これに該当する。

授業場面	めざす生徒の姿	教師に求められる工夫
導入部	本時のねらいやそれに基づく学習課題を自分のものとしてとらえ、意欲的に学習に取り組もうとする。	○ねらいの表記の仕方 ○ねらいや学習課題を提示するまでの手順 ○広がりや対立を生む学習課題
展開部	生徒が自分の力を最大限に発揮しながら主体的に学習に取り組む。	○生徒の主体的な学習を促すための学習形態の設定
終末部	生徒が学習の成果を振り返り、これからの課題を明らかにする。	○学習内容の振り返りの方法の工夫と指導

② 生徒に「自己存在感」を与える授業

生徒に「自己存在感」を与える授業とは、「生徒一人ひとりが学ぶ楽しさやできる喜びを実感できる授業」と考える。このためには、生徒の主体的な学びを保障する、次のような学習形態を設定することが必要である。また、東中学習スタイルの「小集団学習の設定」は、これに該当する。

学習形態	めざす生徒の姿	必要となる教師の生徒への働きかけ
個人学習	生徒が一人で学習課題に向き合い、できるところまで自力で解決しようとする。	○生徒の取組を評価する言葉がけ ○学習が進まない生徒への支援 ○さらなる課題の提示
小集団学習	個人学習の成果を生かしながら、小集団の中で様々な価値観に触れながら協力して課題を解決しようとする。	○小集団学習の目的の明示 ○小集団学習の方法の指導 ○小集団の学習を評価する言葉がけ ○学習が進まない小集団への支援 ○さらなる課題の提示
全体学習	個人、小集団学習の成果を発揮しながら、学習集団全員の力で共通の課題を解決しようとする。	○生徒が発言する機会の保障 ○間違いや誤答、振り返りを生かした授業展開 ○生徒のつぶやきを取り上げた授業展開

### ③ 生徒の「共感的人間関係を育む」授業

生徒の「共感的人間関係を育む」授業とは、「生徒同士が互いに認め合いながら、学び合うことができる授業」であると考えられる。これは、生徒に「自己存在感」を与える授業を行うことを通して具現化される。またこの時に行われる、生徒一人ひとりに対する教師のきめ細かな働きかけは、教師と生徒の間にも共感的人間関係を構築させることにつながる。

### (4) 「東中学習スタイル」と「活用する力」(活用力)の向上との関係

生徒の「活用する力(活用力)」を高めるためには、日々の授業で、習得した知識や技能を活用する学習課題や学習活動を意図的に設定することが必要である。しかし、教師がどんなに授業を工夫しても、生徒の「学習意欲」が低ければ、活用力の向上には限界があることは言うまでもない。

生徒の学習意欲の向上を図るためには、毎時間の授業で、生徒に「分かる喜び」や「できる喜び」を実感させていくことが大切になるが、生徒にとって「分かる(できる)」授業にするための手段の一つである「東中学習スタイル」を全ての教科の毎時間の授業で実践することは、生徒の学習意欲、さらには活用力の向上にもつながると考える。

## 第 2 学 年 2 組 数 学 科 学 習 指 導 案

指導者 河村俊祐

### 1 単元名 「角と平行線」

### 2 単元構成の意図

本学級の生徒は、課題に対して前向きであり、意欲的に話し合い活動を行うことができる。図形の見方や調べ方については、小学校では、第4学年までに直線などの平行や垂直などの関係を、第5学年では多角形と正多角形について学習している。中学校では、第1学年で角の二等分線、線分の垂直二等分線、垂線などの基本的な作図を学習している。こうした学習を通して図形に対する直感的な見方や考え方を培っているが、論理的に考察し、表現することに苦手意識があると考えられる。

本単元は、三角形や四角形などの多角形の角の大きさについての性質を論理的に筋道を立てて推論を行って調べることができるようにすることをねらいとしている。また図形をよく観察したり、作図したりするなどの活動を通して、その推論の過程を自分の言葉で他者に伝わるように分かりやすく表現することが必要である。そこで筋道を立てて考えたり、考えた手順や考え方を的確に説明したりすることができるように、既習の図形の性質の中から根拠となるものを用いて演繹的に説明させたり、他の図形の角の大きさを求めたり、成り立つ性質を説明したりする活動を計画的に設定する。

指導にあたっては、本校の研究主題「生徒指導の機能を生かした学習指導の創造～東中学習スタイルの確立をめざして～」を意識し、次のことに留意する。

	単元全体の働きかけ	本時の働きかけ
自己決定の場	操作、実験などの活動を通して基本的な図形の性質を論理的に説明させる。	どこに補助線が引けるか考え、根拠を明らかにしながら角度を求めさせる。
自己存在感	発見した性質を根拠を明らかにしながら説明させ、他者と共有させる。	ペアの活動で様々な価値観に触れながら課題を解決させる。
共感的人間関係	発見した性質を自分の言葉で他者に伝わるように表現させる。	ペア学習を通して、他者に分かりやすく自分の考えを伝えさせる。

### 3 単元構成(全7時間)

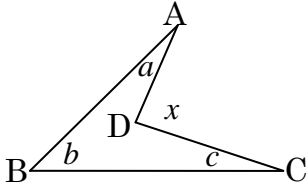
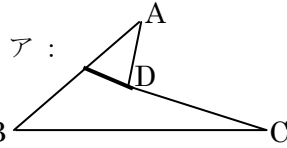
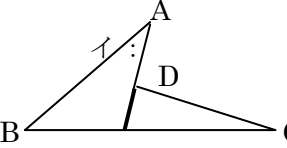
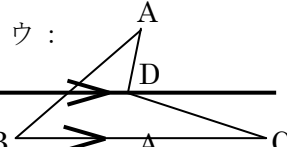
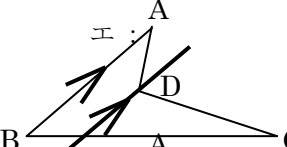
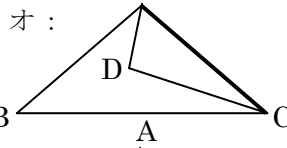
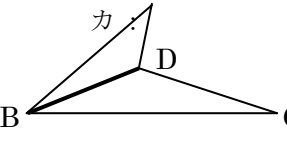
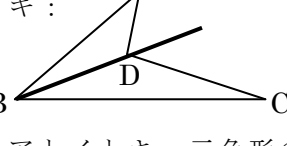
- (1) 直線と角・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2時間
- (2) 三角形の角・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3時間 (本時3 / 3時間)
- (3) 多角形の内角の和を求めよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1時間
- (4) 多角形の外角の和を求めよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1時間

### 4 本時案

- (1) 主眼 補助線を引き、既習事項を活用し伝え合う活動を通して、角の求め方について根拠を明らかにして説明できる。

(2) 準備 ワークシート、復習カード、ホワイトボード、凹四角形の絵

(3) 展開

	学習活動・学習内容	指導上の留意点
導入	<p>1 <math>\angle x</math>の大きさを予想した後で、法則を見つける。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ <math>\angle x</math>の大きさ</li> <li>・ 4つの角の関係 (<math>\angle x = \angle a + \angle b + \angle c</math>)</li> </ul> 	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 様々な凹四角形を用意しておき、具体的な数字で <math>\angle x</math>の大きさを予想させる。</li> <li>○ 直感的に角の大きさを答えさせ、正しい角度を教師が伝えていく。</li> <li>○ 法則に気付いた生徒に手をあげさせ、全体の理解度を把握する。</li> <li>○ 生徒が法則の根拠に疑問を抱いたところでねらいを提示する。</li> </ul>
	<p>2 本時の学習課題を知る。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>4つの角の関係が、<math>\angle x = \angle a + \angle b + \angle c</math>になることを根拠を明らかにして説明しよう。</p> </div>	
展開	<p>3 補助線の引き方を考え、学習課題に取り組む。(個人→ペア→全体)</p> <p>ア： イ：</p> <p>ウ： エ：</p> <p>オ： カ：</p> <p>キ：</p> <p>アとイとき：三角形の外角の性質 ウとエ：平行線の同位角、錯角、三角形の外角の性質 オ：三角形の内角の和</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 補助線の引き方は、1通りだけではないことを伝える。</li> <li>○ 個人で2分間考えた後、ペアになり補助線の引き方を意見交換する。</li> <li>○ ペア学習を生かすために、ペアで共通の補助線を選ばせて、課題に取り組ませる。</li> <li>○ 個人だけで3分間考えた後、ペアになり協力して課題に取り組む。</li> <li>○ 発表は、どのペアにあたるか分からないようにし、全員が課題に向き合えるようにする。</li> <li>○ 発表できるようになったペアには他の補助線での説明を考えさせる。</li> <li>○ 活動の時間内でペアにホワイトボードを渡して、説明を書かせ発表の準備をさせる。</li> <li>○ 他のペアの説明を書き写す時間が無いことが予想されるので回収し、後日まとめて配布することを伝える。</li> <li>○ 本時の類似問題を用意しておき、本時の授業の理解度を把握する。</li> </ul>
	終末	<p>4 本時の学習内容を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 類似問題の演習</li> <li>・ 振り返りの記入</li> </ul>

(4) 評価

- ・ 考えた補助線について、根拠を明らかにして説明することができたか。
- ・ 説明で用いた根拠を正しく理解し、角度を求めることができたか。

## 5 考察

### (1) 生徒による学習内容の振り返り

次の【A】【B】は、2名の生徒が書いた、学習内容の振り返りの一部である。

#### 【A】(補助線を引く目的や意味に気付いた生徒)

私はこれまで補助線を引く意味についてあまり考えてこなかった。でも、今日の授業で、補助線を引くことで、三角形ができ、問題を考えやすくなること、そして、平行線ができるので、同位角や錯角などを見つけやすくなることが分かった。

#### 【B】(補助線を引く目的や意味に気付くことができない生徒)

最初一人では全く問題が解けなかったけど、班で教えてもらったら解くことができた。〇〇くんの発表を聞いて、別の方法もあることを知った。でも、次に同じような問題をするとき、どこに補助線を引けばよいのか、すぐにひらめくことができるかは自信がない。

数学(図形)は、よく「直観やひらめきが大切だ」と言われる。しかし、この一言ですべてを片付けてしまうと、数学を苦手とする生徒を増やしていきただけである。【B】の生徒に自信をもたせるためには、補助線の引く意味や目的に気付かせることが必要である。今回の授業では、このことについて全体できちんと共有することができなかったが、次時の授業で、これら2つの生徒の振り返りを紹介し、補助線について考えさせる授業を行った。生徒による振り返りを全体で共有することで、生徒は、学習に関する自分のがんばりや悩みを教師がきちんと見てくれていることにも気付く。このことは、本校が進める生徒指導の機能を生かした授業の取組の一つである。

### (2) 指導助言

山口県教育庁義務教育課指導主事から次のことについて指導をいただいた。

- ① 文字を使用する意味を生徒にきちんと理解させることの必要性
- ② 主体的な学習を促す学習課題を設定することの必要性
- ③ 数学を苦手とする生徒に対する手立ての必要性
- ④ 生徒の目線に立った、ねらいを表記することの必要性 等

### (3) その他

研修会では、数学の他に、理科、英語の授業研究も行った。研修会終了後は、それぞれ3つの教科の研究協議、指導助言の内容を教職員全体で共有し、それらを各教科の実践にどのように反映するか検討を行った。具体的には、次のことである。

- ① 東中学習スタイルの徹底とその効果的な実践方法
- ② 東中学習スタイルの生徒への意識化
- ③ 単元全体を意識した授業展開
- ④ 学習内容のふり返りを生かした授業展開 等